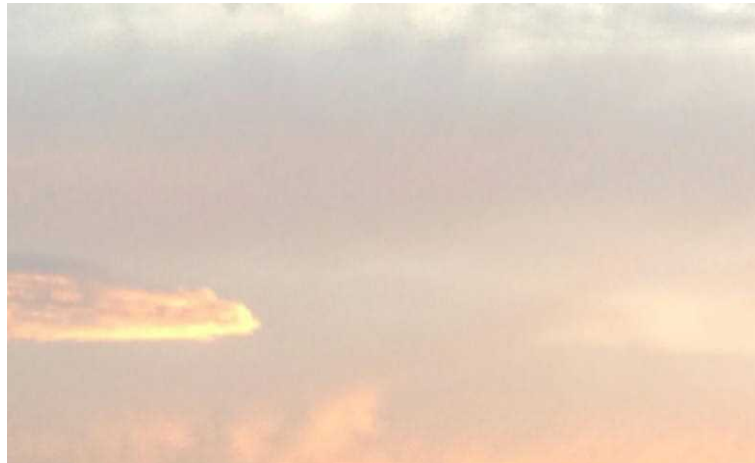


令和2年6月29日

つゆのあとさき



梅雨入りの少し前だったでしょうか、下校時のある風景です。

確か緑色のジャージでしたから1年生。3人の女子生徒さんがうれしそうに体育館方面へ歩きながら、スマホを上の方へ向けています。

「何撮っているの？」

「空・・・」

「なんか・・・いい感じだね」

「うん」

というような会話が続いていたような気がしますが、スタスタと足早に去って行ってしまったので、何も声をかけることができませんでした。

どのような空だったのかを思い出してみるのが・・・、上の写真のような感じでしょうか？

さて、何回か前のこのメッセージで新海誠監督のことに触れました（6月2日付け、「路傍の花」）。繊細なグラデーションを駆使した新海監督の「空」の描き方にも、彼らの心象風景が反映されているように感じます。

この10代特有の何か、それは“adolescence”とか“juvenile”とでも表現される、とても貴重な「時の流れ」を生きている人間特有の「気」なのかもしれません。そして、皆さん全員がそのようなとても貴重な時間のただ中にいる、ということに思いを馳せてみてください。ただ、自分たちがその中にいるということに、当事者であるあなた達は多分気づいていないことのほうが多いのです。

私もかつてその時期にいたはず（メジャーセブンスコードにあれほどドキドキしたのは何故だろう？）なのですが、もう過ぎ去った時間の方が長くなってしまいました。

冒頭で述べた生徒さんのように、「空」を見上げて素敵と感じる、そういった「感性」を大事に育てていきたいものです。さだまささんに『つゆのあとさき』という作品がある（永井荷風の同名の小説とは、描かれる内容が全くかけ離れています・・・）のですが、彼女たちには、きっとその歌詞にあるような「トパーズ色の風」が見えるかもしれません。こういう風景に出会うことができる学校は、やはり素敵なおところだと思うのです。